

パーキンソン病 抑肝散使い治療

Q 六十二歳、元教師。五十代半ばから緊張すると右手がふるえるようになり、文字が書きづらくなりしました。パーキンソン病との診断を受け、初めは薬がよく効きました。しかし次第に効き目が落ち、今は薬の種類も量も増え、何もする気にならず将来を悲観しています。

A パーキンソン病の原因は脳内のドーパミンという神経伝達物質の減少によるとされています。きちょうめんな性格で長く神経を張りつめて仕事をし続けてきた人に多い傾向がある。筋肉の固縮（こしゆく）や振戦（しんせん）、寡動（かどう）など中核症状のほか、質問者は「おこりっぽくなった」「万事にイライラする」「いろいろ

ろ考え眠れない」「ボケたような感じがする」など種々の症状を訴えている。

こうした症状は漢方では「肝」の機能異常と考え治療することが多い。最もよく用いられる漢方薬は抑肝散（よくかんさん）で「肝」の緊張を抑える。中核症状にはドーパミンの補充療法が適しているが、周辺の種々の症状には漢方治療が優れている。

一般には抑肝散に筋肉の緊張の調節や運動障害の調節のため芍薬（しゃくやく）や厚朴（こうぼく）を加えることが多い。気力・体力の衰えが目立つ場合は抑肝散加陳皮（ちんぴ）半夏（はんげ）を用いたり、補中益気湯（ほちゅうえつきとう）や新陳代謝を盛んにする附子（ぶし）を含む真武湯（しんぶとう）なども用いられる。